

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 26 号/2019 年 2 月/編集: 初澤敏生(福島大学)

“平泉らしさ”を求めた 2 年間

国土交通省東北運輸局 藤澤 義人

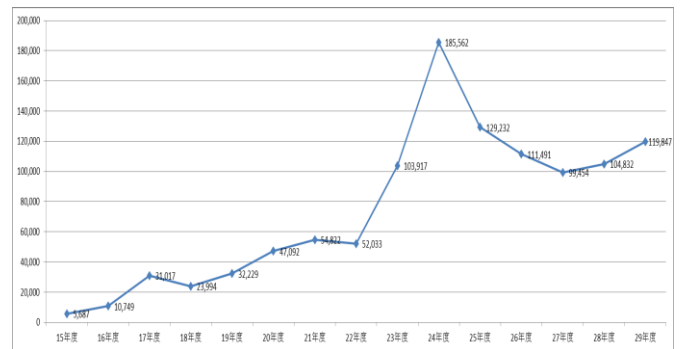
今日は平成 21・22 年度に平泉町に世界遺産政策監として出向した際の活動を紹介します。ただし自分は遺産の専門家でも何でもないので、受け入れ環境を整備するというミッション中心にしながら取り組んできました。

始めに着任早々の 5 月に ICOMOS から「登録延期」という勧告が出された。当時、ICOMOS の勧告というのは非常に重たいものがあって一時落胆していたが、石見銀山において登録延期という勧告にもかかわらず本会議で逆転して登録になったという先例もあったため、強気で考えていた。しかし、7 月の本会議でも勧告通り登録延期となり非常にがっかりした。その理由は顕著な普遍的価値の説明が不十分だということだった。当時タイトルとして挙げたものは

「平泉－浄土思想を基調とする文化的景観」で、目に見えない浄土思想を基調にしたものであり、確かに伝わりにくいものがあつた。次回申請までの 2 年間で顕著な普遍的価値を証明するには難しく、さらにさきに申請した 9 資産の中に浄土思想と関係ない遺跡も含まれているのではないかと指摘もあり、資産を 9 から 5 に絞り込んで再チャレンジに臨んだ。新しいタイトルは「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とし、建築、庭園などの文化遺産をより明確にすることとした。ただ、申請時に「浄土」という言葉を理解していただくよう英訳するのが難しく、訳し方などについてずいぶん議論したようだ。自分は平成 22 年 3 月に国に戻ったが、その後上述のごとくりメイクして再チャレンジし、平成 23 年 5 月に ICOMOS から「登録」勧告をいただいた。そして 6 月 26 日には世界遺産委員会で登録の決議がされ、無事に世界遺産登録された。登録のタイミングとして東日本大震災直後でもあり、当時は震災復興の光ということで、東北全体で喜んでいただいた。

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku

ところで、私がいたときは登録延期ということで非常にがっかりしたが、その時でさえも大きなニュースとなり、「世界遺産登録を目指す平泉」への関心が急激に高まって、お客さまがたくさん来るようになった。そこで、駅にあふれた観光客にいかにか快適に周遊してもらおうかがその後の課題となった。そうした対応策に向けたノウハウや、交通事業者とのパイプがあったことから、新しい交通手段を考えるよりも、既存のものを甦らせてさらに使いやすいものにしていくことを主眼に検討を重ねた。町では従来から町内観光巡回バス「るるん」というのが走ってはいたが、当時は 30 分間隔でかつ走っている時間帯も短かった。これを思い切って 15 分間隔にし、始発と終発時間も広げて、運行本数を倍以上の 27 本にし、利便性を大幅に高めた。さらにバスに乗った時から平泉の風情を感じてもらいたいと考え、中尊寺や毛越寺の許可を何とかいただき、車体に浄土庭園などの史跡地をあしらったラッピングを施した。バスはその後大幅に実績を伸ばし、今では平泉に行ったらとりあえず「るるん」に乗ればほしい史跡地を回れるということで国内外の観光客に定着している。

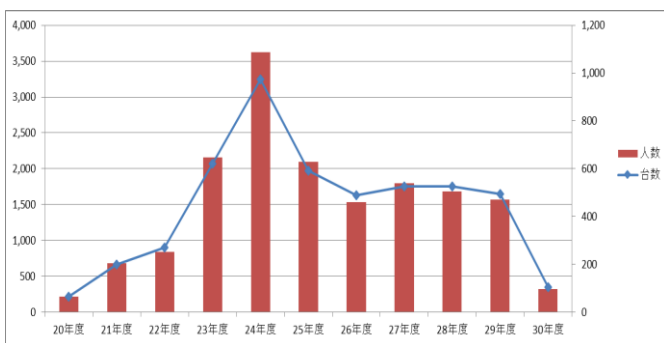


「るるん」バスの輸送実績

さらに「るるん」については、バスの 1 日フリー券も作り、それをお店に提示すれば、お買い物金額の割引やドリンクサービスなど、さまざまなサービス特典が得られる仕組みとした。当時、1 軒 1 軒お店を自ら回ってその協力を得るのに苦労したが、このサービスを未だに続けていただいているのは大変ありがたい。また、今でも協力してくれたお店をバス時刻表にプロットし、それを 4 万枚ぐらい刷って観光客に配布しているが、当時参加してくれていたお店が平泉町内だけだったが、今では近隣の一関や奥州市までも登録していただき拡大しているのもありがたい。

しかし、その後「るるん」のせいで逆にお客さんが減ったとタクシー会社からかなり反発も受けた。その対応策として考えたのが「語り部タクシー」だ。当時から、観光客に対しタクシーの中で乗務員の方から

平泉の歴史などを紹介していただいていたが、その内容をもっと充実させようということで、ベテランの観光ガイドさんに講師として来ていただいて、語り部タクシーの講座を開いた。その後、試験をやって100点満点で70点以上取れば語り部タクシーとしての免許を与えることにしたが、乗務員の方々には熱心に取り組んでいただき、多くの人に資格を取得していただいた。資格取得後、晴れて車体に語り部タクシーとしての黄色いステッカーを貼り、さっそうと町中を走ってもらった。その後この取り組みもお客様から好評をいただき、新たな知識も入れながら3年更新という形で現在も続けている。しかし昨今運転手の高齢化や人手不足などもあって、人数は少しずつ減ってきていると聞いている。



語り部タクシーの稼働実績 (30年度は5月まで)

それから受け入れ環境の整備ということで、駅のバリアフリー化に取り組んだ。その後、インバウンドの流入にも対応すべく、言語のバリアフリーにも取り組んだ。当時、まちなかのサイン表示は景観に配慮し南部鉄器のような素材で作っており、非常にお金がかかった。それを外観上見劣りしない程度の素材とし、そこに多言語表記をさせてもらった。ほかに、「るんるん」の車体やバス停の多言語表記や多言語案内のパンフレット、4カ国語対応のガイドペンなども作らせてもらったし、ホームページの多言語化も行った。当時まだインバウンドを意識した取り組みは進んでおらず、県内においてこれだけ一気に多言語化がなされた地域はほとんどなかったと思われる。

このような事業を進めるうえで、地域の方々の意見も聞きながら行ったことから自然と仲間もでき、いつしか「きよひら会」という組織もできて、定例的に集まるようになった。その中から1つのアイデアが生まれた。当時県南広域振興局の有志の方々を中心となって『みんな なかよし ひらいずみ』という紙芝居を作り、それを使って平泉の浄土思想を小さな子どもにも理解できるように分かりやすくし、より身近に感じていただく活動をしていた。きよひら会ではその紙芝

居のコンパクト版の冊子の英語版、日本語版両方を作り、泊まった方々に平泉らしさを感じていただくため、一般的なホテルによく置いてある聖書に代わって、町内のホテルの1室1室に置けないかと考えた。その後ホテルの理解と協力をいただき、今でもホテルの各部屋の引き出しに冊子を置いていただいている。

さらに当時特にこだわった取り組みに、「平泉まちスポコン」(お気に入りの町場所を推薦するスポットコンテスト)がある。当時町では全ての人が一丸となって世界遺産登録を目指していたというわけでもなかった。町長などと地域懇談会で全部の町のエリアを回ったが、住民の中には観光ばかりに予算をかけないで、農業や福祉などに予算をもっとかけるべきとの不満もかなりあった。観光客の大半は史跡地を中心に周遊するが、平泉には味わい深い地域から生まれた観光資源がほかにもたくさんあった。そこでそうした史跡地や浄土思想の背景となる周りの地域も是非巡っていただき、まるごと平泉を体験してほしい、という思いと、住民の方々にも自分たちの地域を改めて見直し、誇るべき景観や観光資源が身近にないかを再認識していただきたいという思いから、この取り組みを始めた。平泉まちスポコンでは、町民から自分の好きな景観や佇まいなど、写真や絵でも何でもいいので出してくれということで募集し、その結果、約600点もの応募をいただいた。それを町民文化祭で展示して皆に見てもらったり、審査会で選ばれたスポットを丁寧に絵地図に落として「あなたにそっと教えたいもう一つの平泉」と銘打って、観光客などに配ってもある。

他にもお寺と住民の距離をさらに縮めるため、菜の花を植えてその種から油をとって中尊寺に収め、不滅の法燈に寄贈する取り組みもした。加えて、平泉は景観条例が厳しく高い建物を建てられないことからホテルなど泊まる場所が少なかった。だが、泊まってもらわないと町にお金が落ちないことから、住民との触れ合いの幅を広げることも狙って農家民泊の推進なども行った。

最後に、こうした平泉らしさを求める取り組みを自分なりに行って来たが、町では最近街並みの整備や道の駅のオープン、スマートICの建設などハード整備が急速に進んできている。だがその一方で一部の観光客からは「まちの人の暮らしが見えない」とか「無機質なまちだ」という声をいただくこともある。そうした印象を払拭すべく、今後は人との触れ合いや温かいおもてなしなど、ヒューマンな要素を原点に帰ってもらう一度深く考えてみることも必要ではないかと思う。

*2018年9月29日の仙台市講演の要約。